墓場の蝉

不覚にも宇宙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
墓場の蝉

【Ｎコード】
Ｎ１４６２Ｔ

【作者名】
不覚にも宇宙

【あらすじ】
平凡な夏の一日のはずが……
少し不思議な友人達に、なんだかどんどん巻き込まれ
少し不思議な出来事が、なんだかどんどん続いてく。

信号の蛙

仕事場の第八生命保険会社に向う自動車の中、守山栄子は悩んでいた息子の隆の事だ。先日、部屋のドアに大きな穴開けられているのを発見してしまい、しばらく眠れない日々が続いている。

素行の悪そうな友達も増えてきて、どうやら我が家は溜まり場になっているようだ。これが反抗期かと頭をかかえる。今のところ成績が下がってないのが救いだが、これからどうなるかはわからない。

成績が下がり始める前に何とかしなければ、気持ちを引き締めアクセルを踏んだ。

高知の夏、それも自転車での移動となると、日差しの強さでどんどん皮膚が焦げていくのがわかる。

信号待ちをしている間に日陰に入って涼んでいると、小田がものすごい勢いで自転車に乗って現れた。

「発見したっ。」

相変わらずのニコニコ顔で額の汗がすごいことになってるが、関係なしでしゃべり続ける。

「何処に行ってんの？サンプラザ？暑いねぇしかし。腹減ったぁ、飯食った？」

部活が柔道部のおかげですっかり変形してしまった耳を撫でながら、無邪気な目で小田が聞いてくる。思春期の男子にとっては一大事らしく柔道を辞めようかと、最近真剣に悩んでいるらしい。

「空谷の野郎はデートやって、あんにゃろう、せっかくテスト期間中で部活休みやのに、塾もサボるってさ。」

小田の家は学校から遠いので、学生ズボンのまま、カッターシャツは自転車のかごに無造作にいれてある。

このクソ暑い中飲み物も飲まずに、見たこともないパンにかぶりつ

いている。なんだそのパン。
小田だって彼女はいる。空谷にいたってはこの前別れたかと思ったら、早くも別の女とデートだと。

半年くらい前に、塾の帰りに小田が公園の公衆電話で告白するとか言い出したときには皆は盛り上がっていたが、私ははっきり言ってやめてほしかった。クラスでも目立った存在だし、たぶん成功するだろう。置いてけぼりだ。地味な私は置いてけぼりだ。案の定あっさりと告白に成功した小田は、相変わらずの純粋さで私に一言
「お前も告白したら?、誰か好きな人おらんの?愛があっての人生だぜぃ」
だとさ、おっても無理だよ。告白なんかできるわけがない。これで大川塾のメンバー八人中彼女いないのは守山と私の二人だけになってしまった。しかし守山はガリ勉タイプで皆からはいじられるタイプのキャラなので本人も特に気にしてないだろう。
この一大事に守山は早崎に自転車で追いかけられて、噴水の周りをクルクル回っている。暢気なものだ。テンションが上がりきった小田は雄叫びをあげながら噴水に飛び込んでいる。
格差だ、格差社会が中学生の私達にまで。仕方がない、私みたいに地味な人間は、女興味なしキャラで生きていくしかあるまい。
つーか皆早いよまだ中学生なのに。

土曜日は近所のスーパーのゲームコーナーで、塾まで時間をつぶすか、守山の家に集まるか。守山と二人っきりになってもつまらないので、サンプラザで格闘ゲームでもやって時間を潰すつもりだったが小田が居るならどちらでも良くなった。
「んー、小田に任せる。」
小田は脱いであったカッターシャツで顔の汗をぬぐっているが、まったく汗は吸い取れていない、顔中に汗を塗りこんだところで
「暑いき守山んちにしよう、なんかやること考えよう、おもろいこ

と。空谷に負けてられるか。」
信号が青に変わったので意を決して影から飛び出る、小田はまだ「あいつには負けん。」ブツブツ言っている。
サンプラザのほうが涼しいよ小田。

守山の家に汗だくになりながら到着すると、小田は「クーラー頂戴、扇風機じゃだめよ。お願いしますねー。」と呟きながら玄関のドアを勢いよく開ける。
守山のお父さんは若いときに亡くなっているので、お母さんが昼間働きに行っている。
一人っ子の守山の家は当然のように溜まり場になるし、家にも勝手に入るし、守山が居なくても関係なしに塾までの時間、ゲームをしたりマンガを読んだりと、ゴロゴロしてるのも珍しくない。
仕事が終わって夜に掃除をしているのか、きっちりと整理整頓された、二人で過ごすには広すぎるリビングをぬける。二階の守山の部屋に向い、ドアを開けようとすると開かない、鍵がかかっている様だ。
ドアをノックしようとすると小田が体に絡みついてきた。暑苦しさが爆発する。
「ちょっと待った、思春期の男子が部屋の鍵をかける……お邪魔しちゃいけねえ。それが愛だろ?」小田が耳元でささやく。
なるほどと思い体の力を抜くと、小田がドアに飛びかかり右手でバッシンバッシン叩きだした、左手はドアノブをガチャガチャしている。
返事がまったくないので笑いをこらえてしばらく見ていると疑問が湧き上がってきた。
何かおかしいぞ、私たちは塾のある日はかなりの頻度でこの家にくるのだ、しかもこんな真昼間から、いくら思春期の男子だからって……
「ちょっとまって、なんかおかしくない?」

私が言葉を発すると同時に小田の飛び蹴りが炸裂していた。
バキャッ、足がドアに刺さる、本当に刺さっているのだ。
「バカ、やり過ぎだってお前っ。」
「やべぇ、とりあえず逃げるるるっ。」
小田は太ももまでドアに突き刺さった足を引き抜くと、二人で転がるように階段を降り、家を飛び出し自転車に乗り、そのまま息が続く限りペダルを漕ぐ、一つ目の角を曲がる、二つ目を曲がったところで反省会だ、というか説教だ。

「守山どうしたのかな？」しばらく小田に説教していると、いったん沈んだ疑問が再び湧き上がってきた。
「さぁー？寝てたんじゃね？」興味なさそうに小田が返事をする、さっきの蹴りでズボンがやぶれてしまってさらに落ち込んでいる様だ。
二人でサンプラザまでだらだら自転車を漕ぐ、
自殺？まさかな……あの勉強しか興味のない鈍い奴がそんなこと考えるわけないか。
夏の太陽は無言で皮膚を焦がしていく。

鈍感な猿

試験勉強も終盤に差し掛かった所で、空腹がそろそろ我慢できなくなってきていた。
眼鏡をずらし眉間を指でつまんで、上半身を伸ばせるだけ伸ばして、自分の体を眺めてみる。
ランニングとトランクスが汗で体中にびっしり張り付いている。エアコンが故障してしまった為に一人がんばる扇風機が部屋の熱気をかき回している。
なるほど暑い時にはトランクスのほうが、風通しが良い分心地いいのかと、ぼんやりと考えてみる。
「そろそろあんたもブリーフからトランクスに変えたら？見た目にもちょっとは気を使わないと。」
と母が先日、トランクスを買ってきたのだ、僕は別にどちらでもよかったんだけど、こうして履き比べてみるとなるほど、違いは見た目だけじゃないんだなぁと思う。
弁当でも買いに行こうかと、階段を降りキッチンに向い、《食費》と書かれた引き出しから適当に小銭をつかみ取る。
給食のない日は、近所の弁当屋か出前をとって食べて良い事に中学校に入学した時に母と二人で決めた。
ランニングは着替えるのがめんどくさいんでトランクスの上から短パンだけ履き、一日で一番暑い時間に外に出ることにうんざりしながら玄関を開ける。

近所の弁当屋、食いしん坊主は賑わっていた。
スーツや作業着を着た大人が無駄に広い店内に散らばっている、特に食べたい物もないし、暑さで食欲がなくなっていたんで、目に付いた小ぶりの弁当を注文する。
怖そうな高校生がいたので目立たないように、ただでさえ小さい

体をさらに小さくして、端っこの方で待つ事に。今日は小田や早崎達は来るかなぁ、などとぼーっと考えているうちに、注文した弁当が出来上がったようなので、弁当を受け取り、自転車にまたがりイヤホンを耳に挿す。

最近深夜に勉強するたびにラジオを聴いていたせいか、ラジオの面白さに目覚めてしまった、最近のＭＰ３プレイヤーはラジオも聞けるので移動のときは常に聞いている。

イヤホンから英語の歌声が聴こえてくる、ＱｕｅｅｎのＤｏｎ'ｔ　Ｓｔｏｐ　Ｍｅ　Ｎｏｗ、大好きな曲にペダルを漕ぐ足が早まる。

後ろの方が騒がしいが気にしない、スピードはぐんぐん速くなる、なんせ曲はＤｏｎ'ｔ　Ｓｔｏｐ　Ｍｅ　Ｎｏｗなんだ。

自転車を調子に乗って漕ぎすぎたせいでのどが干からびてくる、自動販売機で三ツ矢サイダーを買い我慢できなくなった僕は、その場で口をつける。

いつの日からかお米と一緒に飲むのがお茶でもジュースでもどうでも良くなってしまった。

のどさえ潤えば良いんだ。

炭酸が干からびたのどに張り付いていくのがわかる。

玄関を開けリビングにあるソファーに短パンを脱ぎ捨て、マンガを取ってこようとＵターンして階段を駆け上がる。

――なっ！？　今まで勢いよく進んでいた足がピタリと止まる。

さっきまで自分が居た部屋のドアに穴が。

なんで？

いつ？

首をひねる。

誰かいるのかな？

汗にまみれた右手でドアノブを慎重に回す……
当然鍵がかかっているはずはなく、簡単にドアは開いた。
中を覗いてみたが誰もいない、疑問が脳みそをかき回しているが、まずは弁当だ、穴くらい隠せばよい。
泥棒、強盗でさえなければ良いんだ。
そうか玄関の鍵くらいは閉めておかないとなぁ。

とりあえずドアに何か貼ろうと部屋を探していると、世界地図が出てきた。横長でドアからはみ出るので縦にして貼ることにする。
穴さえ隠れれば良いんだ。
寝転がって縦になった世界地図を眺めていると、いつの間にか寝てしまっていた。誰もこないので本屋に行くことに、ぼーっとするのは好きなんだけど退屈なのはごめんだ。
太陽が照りつける中、自転車を漕いでいると、暑さで少し後悔した。エアコンの効いている本屋に入ると体に張り付いた汗が乾いていくのがわかる。
買いたいマンガはたくさんあるけど、ようやくお小遣いをためてＩ－ｐｏｄを買ったばかりなので金欠だ。週刊誌の立ち読みで我慢することにしよう。
読みたい週刊誌がなくなったので、新作映画を物色しようかとレンタルビデオコーナーに移動していると、金髪ピアスのゴリラ顔高校生が近づいてきた、
ドキドキしながらすれ違う。
何か睨みながら話しかけてくる。
聞こえない、耳にはイヤホンが刺さっているのだ。
聞こえてしまうと恐怖が倍増しそうなので、そのままトイレに飛び込む。
ドアの鍵を大急ぎで閉める。
ズボンのチャックを開ける。
なにかドアから衝撃が伝わってくるが気にせず用をたしていると、

いつの間にかドアの衝撃はなくなっていた。便器がジョボジョボと音をたてだす。

何で知らない高校生にからまれたのか……。

しばらく考えていたが思い当たらないので、考えるのをやめ外にこそっと出て辺りを見回してみたがゴリラは居ないみたいだ。

ゴリラのあっけない撤退にほっとしながら、時計を見る、まだこんな時間か。

せっかく暑い中ここにきたんだ、日が暮れるまではせめてここで。

異性と豚

私が常々思っているのは、小田のタフさと行動力の素晴しさだ。カエルの様に目が離れ、スタイルもたいしたことない、しかし周りの人間を引き込む行動力で、クラスでも一目おかれる存在で女子にも人気がある。

目の前でサンプラザに向かい自転車を漕いでいる小田は、その持ち前のタフさで軽々と気持ちをリフレッシュしたようだ。

「誰かいるかな？誰がいるかな？」

鼻歌を歌いながら自転車を漕いでいる小田を見ていると、守山の部屋の鍵が閉まっていた理由など、何でも良くなっていた。

私も何か一つでも自信を持てればなと思う。学校の成績、運動、見た目など平凡すぎて個性がないのだ。それがコンプレックスで余計に引っ込み思案になってしまって、目立たない存在になってしまっている、悪循環だ。

私以外の大川塾のメンバーは学校でも目立つ存在ばかりで、その一員になっているだけで少し鼻が高かったりもする。

サンプラザに到着して自転車を降りると、前にいる小田が突然叫びだした。

「ごらー、いのばらー、でーとがー、どごいっでんだー。」　大声で叫んでいるせいで声が割れてしまっている。

叫んでいるほうを向くと、猪原が彼女と二人で道の向かいの公園に入っていく姿が見える。

「ごらーっ、むじがーっ。」　小田は顔を真っ赤にしながら、先ほどの憂鬱を吹き飛ばすがごとく叫んでいる。

「畜生、あの豚野郎めー、無視しやがった。不細工な彼女つれて歩きやがって、それで勝ったつもりかぁ？コラぁっ。」

なんだかものすごく失礼なことを、ブツブツ言っている。

そうなのだ、太っている猪原でさえ彼女がいるのだ。まあ確かに

かなり個性的な顔をしている娘なので、
全然うらやましくない。
フリをしているが、
実は少し、
うらやましい。
田舎は不良がもてるという都市伝説は事実で、猪原はがさつでガラが悪い。
そのくせ塾に通う変わり者だ。成績も当然良いわけがないのだが塾には毎日キチンと来ている。周りの友達達もガラが悪い人間ばかりのくせに、私達とも遊んだりする。私みたいな凡人には理解できない行動だ。
まったく女子にモテる要素がなくても、不良というだけで学校で目立つ。
不良になることさえできない私は
正直少し、
うらやましい。
「小田、ほら暑いし、早く入ろうや。」
「空谷に負けるならまだしも、豚にまで負けるなんて、守山のせいでズボンまで破れるし。」
「いや、そりゃ自分が悪いって、ほら入るぞ。」　小田の汗にまみれた背中を押し、店内に入る。
「ちょっと文房具屋に寄って。」　二階のゲームコーナーに向っている途中で小田が言う。
私は小田や早崎、空谷達大川塾メンバーで遊んでいるだけで、十

分に楽しい日々を過ごせている。
学校は墓場のようなもので、放課後までの時間つぶしだ、すでに塾でならった授業をうけ、部活をしていない私は体育の授業でも目立たないようにそれなりに過ごす。
なんで小田は彼女と遊ばないのかな、
私なんかと遊んで楽しいのかな、
なぜだか今日はネガティブだ。
暑さで疲れてしまっているのか、家で明日の試験勉強でもしておけばよかったかなと思う。
普段は家で勉強なんかしたことないのだが。

エスカレーターで二階に向う。
小田の裾が破れたズボンは文房具屋で買った安全ピンで留められている。
パンクロッカー気取りで、エスカレーターを駆け上がって行く姿を見ていると、
ネガティブな考えが少し吹き飛んだ。

悵恨の鵠

一方そのころ、大川塾で唯一の女子である西は、一時間はかかるであろう高知市内に向けて、自転車を漕いでいた。

西が住む町で、唯一の国道が大渋滞になっていた為である。

市内に行く道はここしかないので、事故だとするとなかなか回復しない。しばらく考えたが、結局行けるだけ自転車で行き、渋滞が切れたところでバスに乗り換えるつもりでいた。

動かなくなった車がびっちりと詰まった車道の横を、ママチャリでスイスイ通り過ぎていく。

信号待ちになると暑さで汗が吹き出だしている。久しぶりに彼氏に会うというのに、汗だくになってしまう状況を呪いながら、西は懸命に自転車を漕いだ。

太陽を呪う。デートに誘ってきた彼氏を呪う。最後に渋滞の原因を作った馬鹿者を呪った。

妄想しているうちに、渋滞が途切れてきたので、熱気を吐き出すトラックの横を、ペダルを踏みしめ併走していく。

ついでに、電車が通ってない田舎に生んでくれた両親を怨んでおいた。

無事バスに乗り換え、目的地の駅前公園についたのは、約束の時間のだいぶ前だった。

西はトイレに入り、汗を流すために顔を洗い、鏡を見る。

悪くない顔立ちだと思う、絶妙に垂れた目じり、すっきり通った鼻筋。

今の彼氏もわざわざ隣の高校から告白しに来ていた。

しかし大川塾の連中は、唯一の女子だからといって特別扱いはしていない。女以下の扱いに西は憤慨していた。

あいつらはいつか見返してやる。　西が呟く。

高校生になれば、髪の毛を少し茶色に染め、眉毛を少し手入れするつもりだ、化粧も少ししてやろう、そうすればあいつらはきっと驚くだろう。
空谷君なんかは告白してくるかもしれない、そして華麗にふってやるのだ、しばらく西は妄想する。
鏡の自分が、ニヤニヤしているのに気づき我に返り、隣にいるおばさんの視線も突き刺さってきたので、トイレから飛び出た。
公園のベンチに座ろうかと向っていると、島がベンチに座っていた。
島は小学校の同級生で、中学校では市内の学校に通っていた為、西はしばらく会っていなかった。
「あら、西ちゃん、久しぶりー。」　人懐っこい笑顔で西に話しかける。
なんだかおしゃれだなと西は思う。島は有名なブランドのTシャツを着て髪の毛も少し茶色かった。
田舎の中学校に進学させた両親を怨む。西は当時、何も考えず友達と遊んでいるばかりだった。もう少し両親が教育熱心だったら状況もかわっていただろう。
「なにしてんの、待ち合わせ？デートでしょー、西ちゃんモテるもんねー。」
久しぶりに褒められて、西は少しうれしくなる。あいつらと毎日塾で一緒にいるせいで自分の立場を忘れてしまっていた。
そうなのだ、私は結構モテるのだ、大丈夫だ、と心に刻む。西の目標はたくさん勉強して、いい学校に入り賢い知人を作り、そのグループ内で結婚する事だった。
将来は政治家、公務員、経営者の妻になるつもりで勉強にも力を入れることにした。
西は母親に二年生の時に、塾に通いたいと言った。
それが失敗だった、別に塾に通っていることには後悔はないが、大川塾だけは失敗だったと思っている。

勉強が進まないのだ。
勉強の虫の守山君や天才平君は問題ないが、他の人間がやる気がないせいで、こっちの勉強まではかどらない。
塾全体のレベルが低いのだ、社会のすべての基準は馬鹿に合わせられると平君が笑いながら言っていたが、まさにその通りだと西は思っていた。
西はあなたもその被害にあってますよ、と何度か言ったが平はあまり意味を理解してなかったようだ。
「どうしたのー？ボーっとしちゃってー。あいかわらずだねー。あたしも待ち合わせなんだけどねー、待ちぼうけちゅー。」　にこやかに島が言う。
「あいかわらず、のんびりなんだねーしまちゃんは。」　少し世間話をしていこうかと、西はベンチに腰をかけた。

西はひとしきり島の愚痴を聞いていた。のんびりした口調からくりだされる愚痴は止まらなかった。
西は島の待ち合わせの相手がかなりの男前、中学生にして女関係がグダグダ、今日は初のデートということがわかると、島に今日は帰る事をすすめる。
男になめられると将来ろくなことがない事を、島に忠告する。
大川塾での日ごろの扱いにストレスがたまっていた西は、
女は会社ではセクハラされ、同期の男に比べて出世もできず、家に帰れば家事に育児に追われ、ＤＶだってあるだろう事を島に教えてやる。
のんびりした島はよくわかっていない顔を、西に向けている。
島に忠告しているうちに、西の怒りゲージが溜まってくる。
なぜ、この暑い中、こんなところまで、こなければならなかったのか。
どうして、私は地元の中学校に進学してしまったのか。
なぜ、あんな塾に。

どうして、あいつらは。
なぜ、島はこんなにも素直に、ダメ彼氏を待っていられるのか。
どうして、私はこんなに怒っているのか。
誰のせいだ？
誰が悪い？
怒りが収まらなくなってきた西は、ベンチに座っている島を引っ張りあげ、二人でデートをすっぽかすことにした。
島も道ずれだがしかたがない。
誰のせいだ？
今日最初に怨んだ太陽のせいにしようと、西は思った。

天才と隼

授業も終わり、放課後に廊下を歩いていると、後ろから声が、振り向くと野球部の監督が近寄ってきていた。
「おい早崎、夏の大会もよろしく頼むぞ。お前は重要なうちの部の戦力なんだからな。」
「はい、はーい。ＯＫ、ＯＫ。」
陸上部の俺が戦力になるなんて、相変わらずレベルが低いなと思うが仕方がない、田舎の公立中学校なんてこんなもんだ。
去年の練習試合に、暇つぶしで参加して打ちまくったのが失敗だった。監督からは猛烈な勧誘がくるし、野球部の連中からは妬まれるしでろくなことがない。
まあ仕方がない、俺なんて運動しか取り柄がないからな。

空腹と暑さでぼんやりと自転車を漕いでいると、平が向こうからやってくるのが見えた。
天才平だ。
授業中もぼんやりとしてるし、家で勉強してる様子もないのにテストは常に８０点以上。運動も俺ほどじゃないがかなり動ける、部活やれば良いのにと、いつも思う。何でもできる天才だ。
悔しいので本人には言ったことないが、みんなもそう思っているだろう。
「今日は守山の家行く？」　ちょうど日陰になっていたので自転車を止めて、甲高い声で話しかけてくる。ひょろひょろとした長い足で、器用に壁を踏ん張ってもたれかかっている。まだ制服なので家に帰っている途中なのだろう。
「どうしようかな、部活も休みだし考え中。」　正直なところ家でゴロゴロしようかとも思っている。暑さのせいか、朝から体がだるいし頭もぼーっとしている。

「自分が一パーセントでも良いと思ったほうを選べばよいんだよ。」
地面にある石ころを見ながら平が呟く。
「まあ、そりゃそうなんだけどよー。試験勉強もそろそろしないといけないし。色々あるんだよ、お前にはわからないだろうけど。」
「早崎はスポーツをしてりゃあ良いんだよ、うらやましい。」　平は目線をそらしたまま呟いた。試験勉強をする気持ちが理解できないらしい。しばらく話して平と別れる、どうせ夜になれば塾であうのだ。

休み時間に必死でカンニングペーパーを作っている小田に平が言っていた言葉を思い出す。
「何の為に勉強してるかを考えるべきだ、良い高校に入りたいだけなのか、クラスでモテたいのか、親に怒られたくないのか。もし良い学校に入りたいのならばそれも何の為かを考える、給料をたくさんもらえる仕事をしたいから、友達がいくから、親を喜ばせたいのか。学校のテストなんか零点でもよいんだよ。」
説教なれしている小田は三枚目のカンニングペーパーに入ろうとしていた。

俺は塾にまで通って、何の為に勉強してるのだろう。
頭がぼーっとする。
蝉の鳴き声が大きくなっていく。
「早崎はスポーツしてりゃあ良いんだよ。」　平の声が響く。
ほかの音のボリュームが小さくなっているのか。
平の甲高い声と蝉の鳴き声だけが大きくなっていく。
フラフラしながら自転車を漕ぐ。
ダメだ、今日は家で寝ていよう。
路地の交差点を曲がろうとした瞬間映像がスローに、
目の前に車が、
白色のワンボックスカーだ、

運転手まで見える。
若い女だ、携帯電話で話しているようだ。
目が合う。
このまま曲がると車に当たる。
曲がらずに進む、真っ直ぐに。
右足で力強くペダルを踏み込む。
今度は左足だ。
後ろを振り返る。

俺を避けようと急ブレーキをしてバランスを失った車は、そのまま路地を飛び出し、我が町唯一の国道に飛び出していた。

野卑な慾

「猪原君待った？」　司が小走りで駆け寄ってくる。黒く長い髪が揺れている、前髪も長くおでこを完全に隠し眉毛まで隠れている、身長も女子の割には高く、横に並ぶと俺と同じくらいだ。色白な司は日焼けを気にしているらしく、木陰に隠れる。

「あっ、いや大丈夫、い、今来たところ。」

待ち合わせ場所の校門前に着いたのは、１５分ほど前だったが気をつかって着いたばかりにしておく、ひょっとして約束をすっぽかされたのではないかと、ドキドキしていた。来てくれただけで喜んでしまう。背中と脇には汗が溜まっているが仕方がない、顔だけはせめてスッキリさせようと持ち歩いているタオルで額の汗を拭う。太った人間の汗は女の子にとってかなりの減点だと雑誌で読んだ。せっかくできた彼女だ嫌われるわけにはいかない。

「と、とりあえず飯行こうか。」　いきなりどうかと思ったが、しかたがない。待っている間空腹で倒れそうになっていたのだ。減点にならないようにマナーよく食べることにする。

ようやくできた彼女という存在だったが、女の子というのがこんなにも気をつかう生き物だとは、想像もしていなかった。

遊ぶたびに、電話で話すたびに、嫌われやしないかとヒヤヒヤしながら行動する、

タバコを隠れて吸ったり、万引き、ケンカも何度もした。今まで男友達と遊んでいても味わったことのないスリルだ。正直、女子と気軽にしゃべれる空谷を、最近尊敬している。

少しでも賢くなろうと塾にも通う、女の子の扱いを勉強するために雑誌もたくさん読んでいる。

やっとできた彼女だ。

失うわけにはいかない。

「ラーメン食いに行く？」　空腹感が突き上げてくる。ラーメン&から揚げ定食が頭に浮かぶ。
「うーん、暑いし、マックがいいな。」
そうか、危ない危ない。確かにこの暑い中ラーメンなんて食べてたら、顔面が汗だらけになってしまうところだった。マクドナルドじゃあ量が全然たりないが、しかたがない。デートでラーメン屋はダメなんだなと心に刻む。
「う、うんいいよ、行こうか。」
マクドナルドにつくと司はハンバーガーとジュースを注文し、俺はビッグマックのセットとテリヤキバーガーを注文する。
待ちに待った昼食だ、バーガーにかぶりつきコーラで流し込む。ポテトも一気に口に押し込む、野菜を食べるのは久しぶりだ。
一気に食べ終え、顔を上げると目の前にはなんと……司がいた。すっかり忘れていた、そういえばデート中だったんだ。
「お、美味しそうに食べるね。」　口を引き攣らして司が言う。
しまった、完全に減点だ。とりあえず顔面の汗をポテトに付いてきた紙でぬぐう、汗の減点だけは回避しなければ。
司が小さい口でゆっくりとハンバーガーを食べている間に、今日は何をしようかと考える、この暑さだ涼しいところが良いな。サンプラザでも良いな、本屋で立ち読みでもするか。
「公園にでもいこーか。」　バーガーの包み紙を綺麗に折りたたみながら司が言う。
「う、うんいいね。」　公園か…　店の外の暑苦しさを想像しているとゲップが出た。

公園はマクドナルドのすぐ近くなので、自転車をそのままにして歩いて向う。
くだらない話をしながら公園の入り口に差し掛かると、どこから

か叫び声が聞こえた、何かと思ったが無視する。司の話を聞き逃すわけにはいけない。女子の話を聞き流していると痛い目にあうと空谷に教えてもらっていたのだ。
「図書館行こうか、猪原君は読書とかするっけ？」　この日差しの下なのに涼しげな顔で司が言う。図書館で読む本などないに決まっているがエアコンの誘惑に負ける。下手な話をして減点になるよりは良いかもしれない、大丈夫だ，、たいていの図書館には、マンガの三国志があるはずだ。この前の自習の時間も図書室で過ごすことになって、三国志を読んだばかりだ。何巻まで読んだっけな？
　司が今日借りる本を物色している。とことん趣味が合わないと思う。見た目も美人じゃないのにな、なんで付き合ってるんだろな。
「お待たせ、公園のベンチにでもいこうか、ここじゃ話もできないし。」　三冊の本を抱えた司が受付に向いながら言う。
「そ、そうだね。行こうか。」

　木陰の下のベンチに向っていると、すでに先客がいることに気づく、ベンチに誰かが寝転がっている。
「ちょっと、待ってて。どいてきてもらうわ。」　ここだ、ついに俺の得意分野だ。ここですかさず場所取りができれば高感度アップのはずだ。
「おい、兄ちゃん、こんなクソ暑いところで寝てんじゃねえぞ。図書館行け、図書館。涼しいぞ。」　よく見ると寝てるわけではなく、休憩していたようだ。ゴリラ顔の高校生が汗だくでハァハァ言っている。
「なんだぁコラぁ。女連れだからって調子に乗るんじゃねえぞ、クソガキが。今日はイライラしてんだ。どいてろ、どいてろ。」　ゴリラがウホウホ言っている、息が上がって苦しそうだ。今なら完全に勝てる気がするのだが、振り返ると司が真っ青な顔で手招きしていた。しぶしぶ司の元に戻る。

「どうしたの？もう少しでどいてもらえそうだったんだけど。」
「別にどうしてもあそこのベンチに座りたいわけじゃないから良いのよ。場所なんかどこでもいいの。猪原君ががんばってくれているのはわかってるから。」
真夏の太陽の下で司が大きい声で言う。目線はまっすぐこっちを見ている。薄い唇の上にはうっすらと産毛が汗で光っていた。
どうして付き合ってるんだろうな。
たしか俺が告白したんだよな、
いつだったか、小田が叫んでいたな「俺はキッスがしたいんだよー。早くはじめてのキッスがしたいんだよー。」
平が呟いていたな「いつしたって、はじめては、はじめてだぞ。あんまり早くすると忘れるぞ。子供のときの記憶なんてすぐ忘れるぞ。」
空谷が言っていたな「何回してもキスはいいもんだよ。」
俺はキスをしてみたかったんだよな、
この子を幸せにしたかったんだっけ？
知恵熱と暑さでイライラしてきた。
「とりあえず、あのゴリラしばいてくるわ。どっか図書館にでも行ってて。」　司の顔を見ずに言う。
今日はそういやタバコも我慢してるな。タバコに火をつけながらゴリラに向う。
昼飯も食べ足りないな、やっぱラーメン食べたかったな。

蛙猿と蝉

私は対戦格闘ゲームでは負けない。さびれたゲームセンターだが週末だと対戦相手には困らない。勝ち抜いている限りゲームをやっていられるし、田舎なのでレベルが低い。なので、このゲームセンターで私は対戦格闘ゲームでは負けない。

そろそろ勝ち抜きすぎで、対戦相手がいなくなってきた。後ろから小田の声が聞こえる。

「だからコイツをもっとこっちに寄せろってー、聞いてんのかババア？」　「ダカラちょっと寄せたデショ。コレで我慢しなさい。」

ガラガラ声が聞こえる。ゲームセンターの管理人のババアだ。ババアは片足を引きずって歩くし、言葉のイントネーションが変だし、子供相手に本気で怒鳴るしで、回りの人たちは気味悪がっていた。

そんな人と小田が言い争っている。小田はＵＦＯキャッチャーのフィギュアを彼女にプレゼントしてやるんだと息巻いていた。

ＣＰＵ戦になってつまらなくなったので、ワザと負けて小田の所に向う。

「おい藤村、お前もババアに言ってやってくれよ。ババアお前はだからダメなんだよって。」　小田がババアを連呼する、カウンターに片足を引きずりながらババアが向う。

そのカウンター奥には、無造作にダンボールが積み上げられている。中身はＵＦＯキャッチャーのフィギュアだ。皆はババアが居ない隙に、そこから数々の景品を盗っている。

当然、小田もそのダンボールの存在を知っているが　「ＵＦＯキャッチャーに勝つから良いんだよ。ズルして勝っても嬉しくねえよ。アンパンだけ食っても美味くねえだろ。走って食らい付くから美味いんだよ。」　などと訳の分からないことを叫んでいた。

そんな小田が真剣な眼差しで、穴のすぐ隣に動かしてもらったフィギアを睨んでいる。

「アドバイスくれよ、アドバイス。お前ゲーム上手いだろ。」
「いや、こういうのは専門外。得意なのはレバーとボタンと画面があってガチャガチャやるやつだから。」
「うーっ全然、取れんっ。ババァー。なんとかしろー、愛してるからっ、ババァーっ。なんとかしてくれー。」　小田が騒ぎ出す。
「おい、静かにしろって恥ずかしい。アンパンだけ食べても美味くないんだろ？」
「アンパン？ナニ言ってんだ、俺はこの麦わらゴム人間のフィギアが欲しいんだよ。」

「守山んちでも行く？そろそろ居そうだし。」　無事お目当てのフィギアをゲットした小田が言う。
「そうそう、ドアのことも謝りにいかないと。どうせなかった事にしようとしてるんだろ。」　振り返るとすでに小田の姿はない、エスカレーターを駆け下りながら叫んでいる。「ババァー、有難ナー。愛しテルゼー。」　ババアのイントネーションのマネだ。
ババアは聞こえないフリでＵＦＯキャッチャーの景品を並べなおしている。

出口の自動ドアが開くと同時に、熱気が押し寄せてくる。そうか、またこの暑い中自転車を漕ぐのか。うんざりだな。
自転車にまたがる。黒色のサドルは温度がすごいことになっている。
しばらく進んでいると、トボトボ歩いている守山を見かけた。小田が叫ぶ　「サルー、なにしてんだー。」

「どした？こんなところで。」
「本屋から出てきたら自転車がないんだよ…。」　額の汗をぬぐいながら守山が言う。真っ白のランニングが汗でスケスケになってい

る。
「なんだそりゃ、ダサっ。」　小田が大笑いしながら言い放つ。
「まあいいだろ、とりあえずお前んち行こうぜ。後ろ乗れよサル。」
小田の自転車の荷台に、ちょこんと乗った守山が言う。　「小田、明日の勉強した？藤村はどうせしてないだろ。」
「ん、ああ、勉強？してない。どうせ勉強したって守山に勝てねえんだもん。勉強する意味をいまだに見つけられねえ。」
「藤村は難しいこと考えずに勉強すりゃいいのに。わかってねえなあ。」
「そーそー、藤村はわかってない。もっと言ってやってくれサル。」
小田が息を切らしながら言う。
「小田はもっと勉強したほうがいいよ。」　守山が振動でずれ落ちた眼鏡をあげる。　「というか、そのズボンの安全ピンはナニ？パンクロッカー？ださいよ。」
さすが守山。小田の発想がわかるとは、賢さがちがう。
「うるせえ。下着のランニングでウロウロできるやつがファッションを語るんじゃねえよ。」
小田が後ろの守山を振り落とそうと、ジグザグに自転車を漕ぐ。
守山が小田の背中にしがみつく。
この暑い中、汗だくの二人が絡みつく。見ているだけで暑さが増す。
「藤村は自分がわかってねー。」　二人で叫んでいる。
お前らに私の気持ちは、わからないよ。

厄難の星

バスの待合所に到着したので時計を見る。１２時ちょうど、約束は１時なので１２時３０分のバスに乗ればばっちりだ。

初めてのデートに遅れていくようなヘマはしない。当然この暑い中、汗だくで行くなんて事もしない、身だしなみをチェックするためにトイレに向う。

鏡の中にはいつもどおりの自分がいる。

切れ長の眉毛。綺麗な二重。笑うとできるエクボ、これに惹かれる女子が多いのだ。髪型も昨日床屋に行ったばかりだ、乱れようがない。

顔を洗い、トイレの外に出ると後ろから声が聞こえた。

「ちょっと、空谷君じゃない？」

聞き覚えのある低い声。前の彼女だ。

「たっ、田中さん。やあ、久しぶり。じゃあまたね。」　振り返ると同時に待合所の外に飛び出る。

田中さんとは、先月にデートしたっきりで連絡を絶っていた。つまらなかったのだ。塾の帰りに家の前で、突然告白された。学校も違うし、よく知らなかったが、顔がまあまあ可愛らしかったのでＯＫした。

失敗だった。

話をしていても、真面目すぎて楽しくない。家に電話がかかってきても居留守を使っていた。

「ちょっと待ってよ、ひどいんじゃない。」

背中越しに声が聞こえる。修羅場はごめんだ、走って逃げると追いかけてきた。

待合所の前のまっすぐな道を駆け抜ける。男に女が勝てるものか。早崎や平には勝てないが、それでも足は速いほうだ。

後ろを振り返ると、黒く長い髪を乱しながら、自転車で追いかけ

てきていた。
曲がり角をまがる。まだ声が聞こえるような気がした。
もう一度まがる。
そうだ、この先に守山の家があったはずだ。
もう一度振り返る、誰もいない。
姿が見えなくなると、余計に恐怖が増した。
守山の家に飛び込む。玄関に鍵なんてかかってないことは知っている。
二階に上がり守山の部屋に飛び込み鍵をかける。
守山は留守のようだ。
そういえば、田中さんは若干ストーカーぽいところがあったな。
乱れた息を整える。背中にまだ視線を感じる。
大丈夫だ、守山の家に入る瞬間は見られていないはずだ。ましてや、ここまで入り込んでくるはずがない。
深呼吸をする。体の熱を下げるために扇風機の前で座り込んだ。
もう一度しようとした時に、ドアを開ける音が響いた。
ガチャガチャ。
息が止まり、時間が止まる。
ドアを見つめると、ドアノブが動いている。
嘘だろ、まさか殺されたりなんかはしないよな。何度もニュースで見たストーカー殺人の映像がよみがえってくる。
ドアが音をたてて暴れだした。
動けない。
唾を飲み込む。
バキャッ。
音をたて、ドアから足が飛び出してきた。
う、嘘だろー。
固まっていた体を引きちぎり、後ろにあるベットに飛び込み、布団をかぶる。
もう、やめよう。この性格を改めよう。

今の彼女を大事にしよう。

しばらく布団の中でガチガチ震えているうちに、周りの音が何も聞こえないことに気づいた。

そっと顔を布団から出す。

扉は開いていない、どうやらあきらめたようだな。

ゆっくりと扉を開けてみる。誰も居ないことを確認すると守山の家から飛び出る。穴が開いているのを俺のせいにされてはたまらない。

時計を確認すると12時15分。

大丈夫だ、急いでバス停に戻れば間に合うはずだ。

走る。せっかくの新品のTシャツも汗でビチャビチャになってしまった。

バス停留所に戻ってくる、田中さんが待ち伏せしているかと思い、ドキドキしたが大丈夫らしい、代わりに西ちゃんが居た。

「ハァ、ハァ。やあ、西ちゃん。ごきげんよう。あいかわらずお綺麗で。」

「どしたの、汗だくで。」

「いや、ちょっとね、デートに遅れそうで。んで、走ってきた。初デートに遅れるわけにはいかないだろ？」

「そりゃ、がんばってね。けどね、なんかバス遅れてるみたい。渋滞だって、事故だって。」　改めて目の前の国道を見てみる。道には車がびっちりと詰まって動かなくなっていた。

「ま、まじかよぅ。」　体の力が抜ける。

「けど、空谷君なら自転車で行けばギリギリ間に合うんじゃない？あたしも遅れるわけにはいけないから自転車で行こうと思ってるの。」

そうか自転車か。今から家に走って帰り、自転車に乗り市内へ行く。遅刻は間違いないがここで待っているより早く到着できるだろ

う。
「よし、自転車で行くことにするわ。またね、今度デートしようね。」
「がんばって。ちょっと遅れたぐらいで怒るような女はこっちから振っちゃいなさい。まあ空谷君なら大丈夫だよ。ガンバレー。」
西ちゃんが、にこやかに手を振っている。

走りっぱなしでさすがに疲れてきた。少し歩く。どうやら今日は散々な一日になりそうだ。
のどが渇いて、ひりついてきた。自販機でジュースを買おうとすると、見覚えのある自転車が止まっていることに気づいた。守山の自転車だ。
ちょっと借りよう。家に一度帰るよりは早い。ついでにさっきの出来事も報告しておこう。俺が悪いんじゃない。あのストーカーが悪いのだ。
本屋の中に入る。汗だくのTシャツがエアコンで乾いていくような気がした。
このまましばらくエアコンで涼んでいく誘惑にかられたが、守山を探す。何度も言うが初デートで遅れるわけにはいけない。
背の低い守山を探すのは骨が折れる。各列を見て回るがいない。洗面所の方かと思いさがしていると高校生がこっちに向ってきた。
「おい、おめえ空谷だろ？」　ゴリラ顔が睨みながら、俺の名前を言っている。誰だ？
「は、はぁ、そうっすけど。」
「てめえ、俺の女にちょっかい出してただろ。なめやがって。人の弁当を間違えて持っていくガキはいるし。最近の中学生はおちょくってんのか？」　ゴリラ顔が真っ赤にゆがむ。
「べ、弁当間違えたって、なんすかそれ。」
「俺のとんかつ弁当を持っていったガキがいるんだよ、そこの便所に。そいつが頼んでたのはワンパク弁当とかいうふざけた弁当なん

だよ。」
ゴリラがまだ何か叫んでいるが、もう理解した。くだらない話に付き合っている暇はない。腹に蹴りを一発。そのままダッシュで店の外に駆け出した。便所に逃げ込んでいるのは守山だな。人の弁当を間違って持って帰るなんて、サルらしいわ。
自動ドアから飛び出る。
後ろを向くと、ゴリラが追いかけてくるのが見える。顔が真っ赤になって赤鬼のようだ。
守山の自転車にまたがり、そのまま市内のほうへ立ち漕ぎした、振り返ると、ゴリラ改め赤鬼がまだ走ってきている、が距離はどんどん開いていく。あきらめるのも時間の問題だろう。哀れなり赤鬼。
守山の自転車がガチャガチャ音をたてながら進んでいく。
もう時間のロスは許されない。
サドルから腰を浮かしたまま、ペダルを力強く踏みしめた。

駅前公園には三十分の遅刻で、何とか到着した。
服は汗だく、足もパンパンだ。
最悪の一日だ。
だが重要なのはここからだ。
生き方を改めたのだ。
島ちゃんお待たせ、どこにいるんだい。

試験の蝉

英語の試験がもうすぐ始まる。
結局、勉強しないままで当日になってしまった。
別にかまわない。私の中学校での生活は墓場のようなものだ。
放課後が少しだけ楽しければ、それでいい。
どうせ高校でも、平凡な毎日が続くのだ。
少しくらい、家で勉強しても平凡な私の人生は変わらないだろう。
早崎は熱がでて寝込んでいるらしい。そういえば昨日出会ったとき体調がわるそうだった。
隣では、悪あがきをしている小早川がいる。昨日の塾でも大慌てで勉強していた。
チャイムがなって試験が始まる。
さてと、どんな問題かな。
名前を書く。
『Ｔｏｕｓｏｎ　Ｔａｉｒａ』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1462t/

墓場の蝉

2011年7月5日03時31分発行